

# 好調続く鶏肉需要、4年連続で過去最高を更新

理事研究員 堀内芳彦

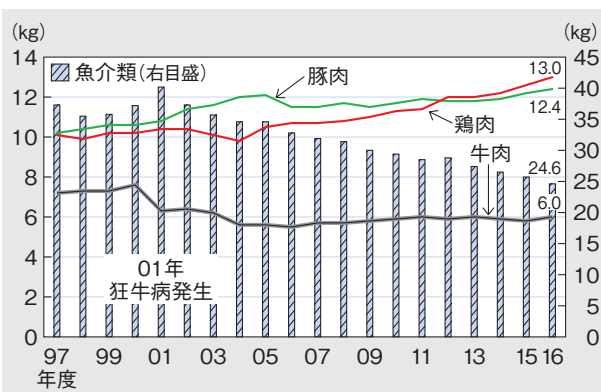
## 1 鶏むね肉人気が定着し、好調続く鶏肉需要

近年の日本人の食生活は、魚介類の消費が減少し肉類が増加している。直近10年の1人当たりの年間消費量(供給純食料)でみると、魚介類は2006年度32.8kgから16年度24.6kgと25.0%減少したのに対し、食肉(牛肉、豚肉、鶏肉)は27.7kgから31.4kgと13.4%増加している。なかでも鶏肉は、10.7kgから13.0kgと21.5%増加し、12年度からは豚肉を上回り食肉消費の主役となっている(第1図)。

マクロベースでも、鶏肉消費量(骨付き肉ベース)は、14年以降、毎年過去最高を更新し、17年は2,445千トンとなった(第2図)。

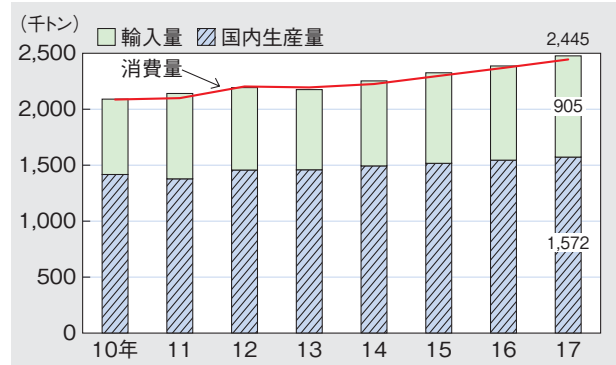
この要因として、消費者の食の3大志向が、経済性、健康、簡便化といわれるなかで、まず経済性志向の点で、鶏肉が他の食肉より安価なことが挙げられる。16年度の東京の小売価格(総務省「小売物価統計調査」)でみると、100g当たり国産牛(ロース)903円、豚(もも)195円に対し、鶏(もも)は136円と安価である。

### 第1図 食肉および魚介類の1人当たり年間消費量の推移



資料 農林水産省「食料需給表」  
 (注) 消費量は1人1年当たり供給純食料。

## 第2図 鶏肉需給の推移



資料 農林水産省「食料需給表」、(独)農畜産業振興機構「鶏肉需給表」

(注) 1 骨付き肉ベース。  
 2 輸入量は鶏肉調整品を含む。

次に、健康志向の点で、特に鶏むね肉の評価が高まったことが挙げられる。その特徴として、高たんぱく、低脂肪で、豊富に含まれるイミダゾールジペプチドが疲労回復に効果があるといわれる。13年に大手コンビニがむね肉を使った「サラダチキン」を発売したことを契機に、その認知度が一気に高まった。サラダ具材として簡単に利用できる点は簡便化志向にも合致し、インターネットのレシピサイトで鶏むね肉料理の投稿も増え、ぐるなび総研の17年「今年の一皿」に「鶏むね肉料理」が選ばれるなど、家庭の食卓に定着しつつある。

## 2 需要増も農場増設に多くの課題

好調な鶏肉需要を受け、17年の国内生産量は1,572千トンと6年連続で過去最高を更新した。また、輸入量(鶏肉調整品〔唐揚げ、焼鳥等〕を含む)も905千トン(鶏肉と鶏肉調整品の比率はほぼ半々)と3年連続で過去最高を更新した(第2図)。

ただし、過去3年間の需給動向をみると、消費量が9.8%増加するなかで、国内生産量の伸び(5.2%)は輸入量(19.2%)に比べ小幅にとどまっている。

この主要因として、国内生産量の99%を占めるブロイラー（ふ化後3か月未満の肉用若鶏）業界が、大規模な装置産業化し、短期的には、増産が容易にできない生産構造となっている点が挙げられる。

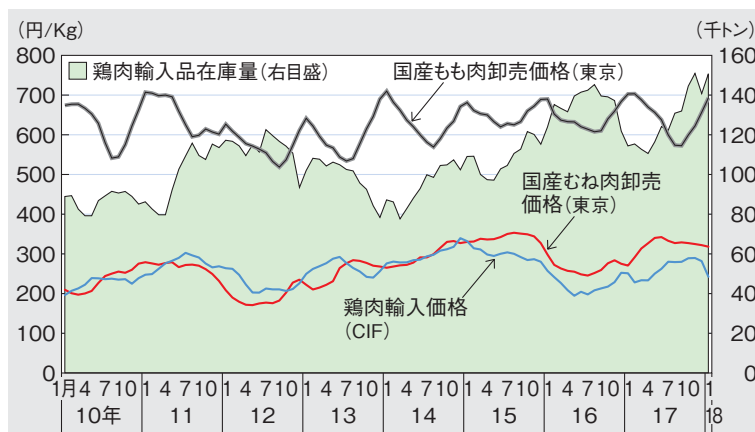
現在、日本のブロイラーは、鶏種として海外育種が9割強を占め、飼料(経費の6割強を占める)は、穀物主体の配合飼料で大部分を輸入している。いわば大半を海外からの輸入資源に依存し、食材特性に大きな差のないコモディティ商品となっている。

このため、大規模な食鳥処理場と農場を設けて、量産化によりコスト削減を図ることが競争条件となり、ヒナのふ化から飼育、食鳥処理加工までを一貫して行うインテグレーション化が進展している。(一社)日本食鳥協会会員名簿(平成28年度版)の年間処理羽数ベースで推計すると、インテグレーターの上位9グループで6割強のシェアを有している。

食鳥処理場と農場の増設は、用地確保の段階から竣工まで1、2年の短期間でできるものではない。このため、ここ数年の需要増加に対し輸入品への依存度が高まっている。

農場増設は、防疫対策や地下水確保で用地が限定されることに加え、鶏ふん処理等での地域対策も必要で、用地確保に相当高いハードルがある。また、各業種で人手不足感が強まるなか、食鳥処理場の増設では、雇用確保が難しくなっている。今後は、こうした課題に迅速に対応できるインテグレーターがシェアを伸ばしていくとみられる。

第3図 鶏肉相場と鶏肉輸入品在庫の推移



資料 農林水産省「食鳥市況情報」、財務省「貿易統計」

### 3 鶏肉相場は底堅く推移か

国産もも肉の卸売価格をみると、年間で鍋需要の高まる冬場に上昇し夏場に下落する傾向があるが、直近の4年間では、年間を通じてほぼ600円/kg台で推移している(第3図)。

一方、むね肉は主に加工業務用に使われることから、国産むね肉の卸売価格は、競合する輸入品の在庫動向に左右される傾向がある。17年の卸売価格は、前半は、16年後半からの輸入品の在庫調整進展で300円/kg台前半まで上昇、後半は、在庫が増加したものの好調な需要が下支えとなり300円/kg台前半で推移した。足元では、輸入品在庫が過去最高水準にまで積み上がってきており、目先の市況はやや軟化が予想される。

しかし、中期的にみると、(株)富士経済が18年2月に公表した国内加工食品市場調査では、サラダチキンの市場規模は17年見込みで269億円(前年比44.6%増)、22年予測で311億円まで拡大すると予測しているなど、堅調な需要は継続し、当面、鶏肉相場は底堅く推移するとみられる。

(ほりうち よしひこ)